姫下（ひめした）遺跡

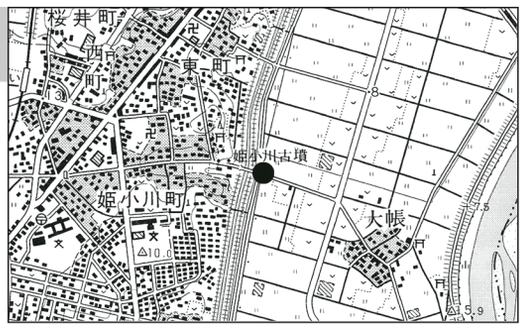
所　在　地　安城市姫小川町
（北緯34度54分52秒 東経137度5分49秒）

調査理由　鹿乗川河川改良工事

調査期間　平成17年10月～平成18年3月

調査面積　3470㎡

担　当　者　宮腰健司・鈴木正貴



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成17年10月から平成18年３月にかけて実施された。調査区は東西に横断する道路によって２調査区に区分され、北側を05Ａ区、南側を05Ｂ区と呼称した。

立地と環境　姫下遺跡は、碧海台地縁辺部直下の沖積地に立地する。遺跡の標高は約７ｍで、台地との比高は約４ｍを測る。この遺跡西側の台地縁辺には、獅子塚古墳・姫塚古墳・姫小川古墳・王塚古墳などの古墳が並び、特に全長69ｍの前方後円墳である姫小川古墳は、桜井古墳群中でも最大規模の古墳である。また遺跡の東には内行花文鏡を出土した八ツ塚古墳が、北約700ｍには人面文土器を出土した古墳時代初頭の亀塚遺跡や、南約700ｍには奈良時代の木簡が出土した下懸遺跡が所在する。

調査の概要　今回の調査で確認された遺構は、大きく弥生時代中期、古墳時代前期～中期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代、江戸時代に分かれる。また地形的にみると、05Ａ区と05Ｂ区間、05Ｂ区の南側に走る河川によって区切られている。05Ａ区と05Ｂ区間の河川は古墳時代後期以降に形成されたと考えられ、05Ｂ区の南側河川は古墳時代前期以前に形成され、古墳時代中期には大部分が埋没するが、中世までわずかに落ち込みが残存している。

弥生時代　05Ａ区の北西部で２棟の竪穴住居と土坑１基が検出され、弥生時代中期後葉の土器が出土している。

古墳時代前期～中期　05Ａ区から05Ｂ区北側2/3程が居住域で、その南側に北東から南西方向の河川が走る。居住域部分は、古墳時代後期以降の削平を受け、遺構の遺存状況はよくないが、少なくとも十数棟以上の竪穴住居があったと想定される。また05Ａ区では北西―南東方向に走るSD42が、05Ｂ区北西部では、炭化物・焼土を含む土坑群が16基検出されている。河川は大きくNR01とNR02に分かれ、幅の広いNR02埋没後、幅の狭いNR01が形成される。さらにNR01は埋没過程で、断面が逆台形を呈し、北東から南西・南方向を向く形状から、断面がややＶ字形で幅が狭く、東西方向を向く形状に変化する。NR01北岸を中心に、南岸、埋土中より高坏・壺・小型壺・鉢・甕・Ｓ字状口縁甕などの多量の土器や管玉・ガラス小玉が出土し、同じく河川埋土中より鍬・縦杵・横槌・杭や大型加工材を含む木製品も多く出土している。

古墳時代後期～奈良時代　05Ａ区の北部では古墳時代前期～中期の溝SD42に重複するように走る断面Ｕ字形の浅い溝SD43や、やや弧状になるように走る溝群が検出されている。また遺跡全域において、当期に属すると思われる、北西―南東方向の溝が多数検出されている。

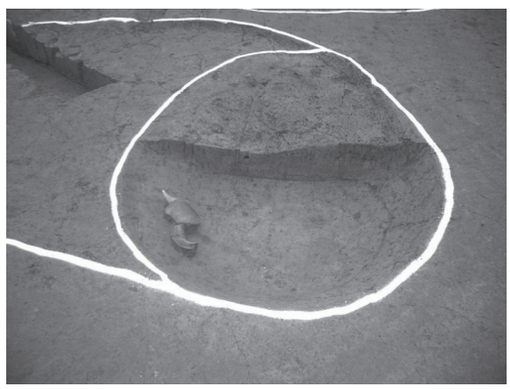
平安時代　05Ｂ区南の河川は窪地状に落ち込んでおり、それより北側は居住域となる。居住域では70棟以上の竪穴住居や、当期と考えられる２×２（３）間の掘立柱建物が検出されている。

江戸時代　やや北東―南西方向を向く溝群や、05Ａ区南部を中心に連続する土坑群が検出されている。

まとめ　今回の調査では、古墳時代前期～中期と平安時代の遺構群が検出されたことが特筆される。古墳時代前期～中期の遺構群は、多量な土器・木製品の廃棄がみられた河川利用のあり方や、隣接する桜井古墳群との関連が注目される。また平安時代の遺構群は、碧海台地縁辺部に展開する同期の遺跡群の動向を考える上で貴重な事例になると思われる。

（宮腰健司）

05A区 江戸時代土坑群

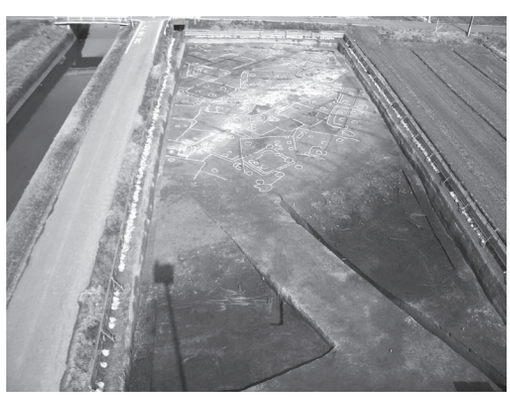


05A区 弥生時代土坑

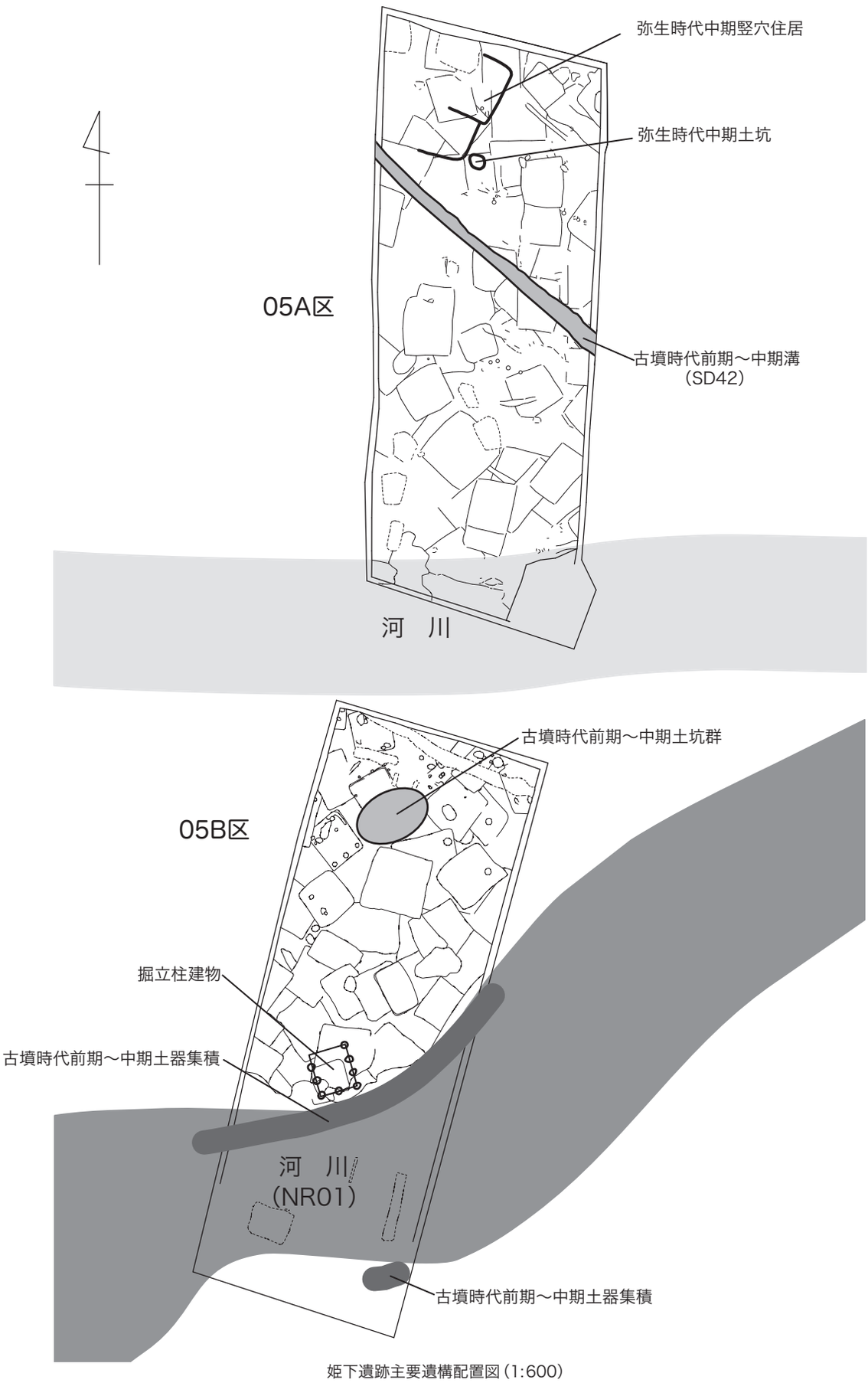
姫小川古墳と05A区古墳時代後期～奈良時代遺構

05A区 SD42

05A区　古墳時代・平安時代遺構

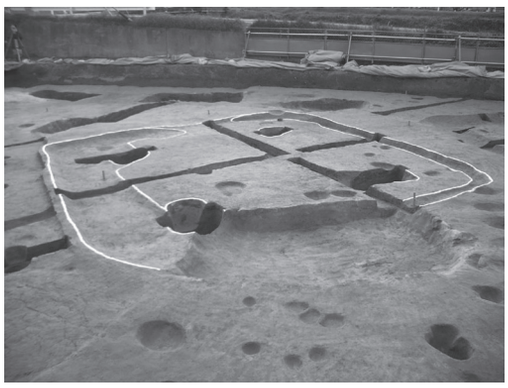


05B区　古墳時代・平安時代遺構



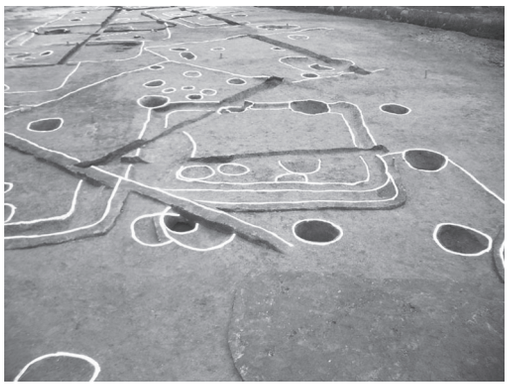
姫下遺跡主要遺構配置図（1:600）

05B区 古墳時代中期竪穴住居



05A区 平安時代竪穴住居

05A区 SD43遺物出土状態



05B区 掘立柱建物

05B区 NR01

05B区 NR01北岸土器出土状態

05B区 NR01北岸土器出土状態

05B区 NR01木器出土状態